Diskunion Staff's Choice
Top Recommend
Jazz Album
Of 2026

disk union
ディスクユニオン
DIVE INTO MUSIC.

これぞ、スピリチュアル！なライヴ音源

1

AMIRI BARAKA　New Music - New Poetry



【CD】
label
MODERN
HARMONIC

これぞ、スピリチュアル !! と言いたいアミリ・バラカの力強い言葉とサックス奏者、デヴィッド・マレーによるホットなライヴ音源の初 CD 化が遂に実現 !! ニュージャージー州ニューアーク出身の詩人、作家、音楽評論家、思想家、活動家、アミリ・バラカが 1982 年にリリースしたアルバム「ニュー・ミュージック - ニュー・ポエトリー」(India Navigation/IN-1048/LP) が待望の初 CD 化 / 初のアナログ盤 LP レコードでの復刻がグレイトな新装ジャケット仕様で実現。スピリチュアルなデヴィッド・マレーのサックスとスティーヴ・マッコールのドラムをバックにしたどす黒いアミリ・バラカの熱気あふれるポエトリー・リーディングがリスナーの脳裏を直撃するホットなニューヨークはサウンドスケープでのライブ音源を収録。ジン（小冊子）風の詩のインサートと、デヴィッド・マレーによるライナーノーツも収録！

商品部　川田

決して編成のインパクトだけの作品ではない

2

BEN WENDEL　バーコード



【CD】
label
コアポート

ここまでヴィブラフォンがフィーチャーされているアルバムというのも珍しい。何せジョエル・ロス、パトリシア・ブレナン、サイモン・ムリエ、フアン・ディエゴ・ヴィジャロボス、という現代ジャズ・シーンで注目を浴びるヴィブラフォン奏者が 4 人参加している。1 テナー＋ 4 ヴィブラフォン。珍しいどころか前代未聞である。とはいえ当然だが編成のインパクトだけの作品ではない。パーカッシブなアンサンブル、残響を活かしたバラード、ユニゾンで上に下にと吹きまくるベン・ウェンデル、と聴きどころ満載。コンテンポラリー・ジャズの即興性と、現代音楽的なパーカッション・アンサンブルを融合させた、ジャズの枠組みでも現代音楽の枠組みでも捉えきれない " 規格外 " の作品だ。多様な作品が生まれる現代ジャズ・シーンが未だ秘めたる新たな可能性と、シーンの尽きない面白さを感じていただけると思う。

新宿ジャズ館　逆瀬川

抱擁の魔法とその行方

CARLOS NINO Bubble Baths For Giant

3



【レコード】
label
CNF

過去 20 年以上に渡り、LA ビートシーンの渦中において根源的に活躍してきたカルロス・ニーニョ。BUILD AN ARK 時代とその後の印象ゆえ、スピリチュアルやヒップホップ、アンビエントの文言が準用に使用されますが、自然や瞑想的な精神世界を基に、即興表現をドキュメントとして擁するのが現在の本質的な立場です。そして懇意であるドン・チェリーやファラオ・サンダース、ニューエイジなどの表現メソッドが回流する形で文脈化されています。本作はこれまでにも試みられた海を主題にリキッドサウンドを展開。環境音や既存音源のコラージュなど、時間軸や学理からも離れたポスプロが施され、見た夢を語るかのように現象全体を受け入れています。昨年ついに BLUENOTE から連名での作品をリリースしました。DON WAS 体制の文脈観によって彼が登壇することとなり、受け入れる側にもある種の消化が求められる事態となりました。

新宿ジャズ館　有馬

時代はポール・モチアンを必要としている

CHRIS CHEEK Dear Paul, Play Music By Paul Motian

4



【CD】
label
FRESH SOUND

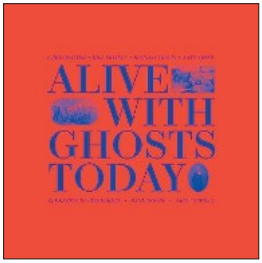
今年はクリス・チークが印象深い。ここ数年のリリース頻度の減少からファンとしては喉がカラカラだったので尚のことだ。2025 年の “Keepers of the Eastern Door” で渇き切った喉をほっと潤おされ、今年は Human Being Human & Chris Cheek 名義の “Being” につづき、「親愛なるポールへ」と題された本作がリリース。いや〜、これには潤されすぎてビショビショになった。前二作はコンテンポラリージャズとして高い完成度の「作品」だったが、こちらは本当にモチアンへの「私信」のようで、「あなたから受け継いだものを僕も伝えていきます」とかつての師匠に向けたメッセージが、モチアンの没後 15 年経過した今だからこそグイグイ訴えかけてくる。同じくモチアンのサイアーラインを継承するヤコブ・ブロの新作 “8” でもモチアンの楽曲が取り上げられ、当然クリス・チークが参加しているので合わせて必聴のこと。

JazzTOKYO　羽根

自由と正義と分断と暴力を聴く

CHRIS POTTER Alive with Ghosts Today

5



【CD】
label
EDITION RECORDS

19 世紀のアメリカに生きたジョン・ブラウンは急進的な奴隷制廃止論者で、奴隷制を神への罪と断じ、廃絶のために殺人や武力行使を辞さなかった人物だ。彼は 1859 年に処刑された。2 年後に始まる南北戦争で北軍兵士が歌った、後に《リパブリック讃歌》へと繋がる《John Brown's Body》は彼の屍骸のことを歌う。円熟のテナー、クリス・ポッターは本作で、そんなジョン・ブラウンの軌跡と残像を、矛盾と困難に満ちた現代のアメリカから見つめ直す。ビル・フリゼール擁する七重奏がアメリカーナ的ムードを醸すなか、ポッターは確かな熱と知的な説得力でグイグイと音楽を展開していく。かの国の様々な風景と、かの地に生きて死んでいった人々の記憶。ポッターはそれに耳を澄ませ、言葉を交わす。自由と正義と分断と暴力。その対話に結論は出ない。それでも問い続け、考え続けよ。矛盾を抱いたまま、ポッターの音楽は力強く進み続ける。

JazzTOKYO　東舘

キャリアに裏付けられた唯一無為の存在感

GRETCHEN PARLATO Wise Ones

6



【レコード】
label
EDITION RECORDS

これまでのキャリアを経て盟友ともいえる豪華メンバーが参加した Gretchen Parlato の新作。私個人としては、Stevie wonder による名曲 “If It’s Magic” のカバーがハイライト。原曲が持つシンプルな美しさをうまく昇華した Robert Glasper のローズアレンジに彼女の歌声が見事に調和した極上のカバーが特に格別で一気にそのサウンドに引き込まれてしまった。参加ミュージシャンの個性と共に、ジャズ・ネオソウル・フォークと様々なサウンドアレンジの楽曲で構成される一枚。彼女が持つ魅力の一つである楽曲と歌唱がシンクロしグルーヴする心地良さに浸りながら、現代ジャズのサウンドの奥深さも同時に味わうことができる内容となっている。長いキャリアを積みシーンを代表する存在となった彼女。純粋に音と向き合うリアルな姿をこの作品を通して、是非、感じ取っていただきたい。

渋谷ジャズ／レアグルーヴ館　田中

「集中して聴く音楽」とはまさにこのこと。

JEFF PARKER Happy Today

7



【レコード】
label
INTERNATIONAL ANTHEM

伝説的ポストロックバンド「Tortoise」のメンバーでもある Jeff Parker 氏のバンドによる、長尺の実験的な即興セッション。スタンダードからミニマル・アンビエンスへと変化していった現代ジャズシーンの重要人物。来年 1 月には BLUE NOTE のライブも予定。山火事や政権の変動に際した社会的・精神的にも厳しい渦中、皆とまた音楽を奏でることができた体験から喜びを象徴するタイトルが誕生した。即興とはいえ衝動的な演奏ではなく、忍耐と意図に基づき実際に動く前にじっくりと考える、対話の大切な部分を捉えている。「観客がいようがいまいが、僕らは音楽を演奏し、僕たち自身のためが人間全体のために音楽を作る事に繋がり、僕や人々に与えられるものの一つがこの音楽なんだと感じている」と語る。観客のエネルギーを糧にして自らのために放たれる循環によってじわじわと起こる奥底の存在。長引く余韻、幸福感。強くお勧めします。

渋谷ジャズ／レアグルーヴ館　五十嵐

2020 年、2025 年、それから

JEREMY CUNNINGHAM Passing Fires

8



【レコード】
label
NORTHERN SPY

前作『A Better Ghost』に続き最高だ。今回はゲストも多いが、多くが共同の作曲とクレジットされており、フォーリーなピアノから現行シカゴ・ジャズまで楽曲の幅を持ちつつも、全体の統一感は崩れることはない。インタビューによればアルバムはコロナ禍、そしてカリフォルニア山火事についてであり、その間の喪失、被災（Jeff Parker 含めた何人かは本当に大変だったようだ）、そして再び集まることを反映させたものだという。共同体による創造がグリーフケアになった、ということだろう。多くは歌心あるメロディーがあり、穏やかなムードなのだ。ライル・メイズと組んでいたころのパット・メセニーを思わせるブラジリアン “To The Sky” は特に繰り返し聴いてしまった。近年、ジャズから出てきた作品では随一のポップ作であり、現在のシカゴの活躍を見るうえでも非常に重要な内容になっている。ぜひ広く聴かれてほしい。

吉祥寺ジャズ館　荒川

変わらない魅力と新しい風景

JULIAN LAGE Scenes From Above

9



【レコード】
label
BLUE NOTE

ジュリアン・ラージの今作は、前作と同じジョー・ヘンリーをプロデューサーに迎え、オーソドックスなオルガントリオでありながら、アンサンブルを重視し、インディー・ロックのようなテクスチャーが取り入れられているのが特徴的です。新しい感覚でのエフェクトやバンドの一体感、対話感が、ジュリアンラージらしいアメリカーナやルーツ・ミュージックを感じる楽曲の魅力をより一層引き出しています。民族音楽へも関心をもつ彼ならではの視点も映し出されていて、楽曲ごとに様々な表情を見せてくれます。とても開けた作品で、世界の潮流とも一致しているような気がしています。これまでどこか漂っていたパンデミック下の閉鎖的な空気が完全に消え去ったような、外に出かけたくなるような開放的な心地よさがあり、仕事帰りに歩いて景色を眺めながら聴きたくなります。そんな日常の風景にもよく馴染む作品なので、レコードでも手元に置いておきたい一枚です。

渋谷ジャズ／レアグルーヴ館　田口

ルーツとバラードが奇跡の融合を遂げた傑作

MELISSA ALDANA Filin'

10



【CD】
label
BLUE NOTE

メリッサ・アルダナの『Filin'』は、ラテン・ジャズやバラードが好きな方にとってまさに胸が躍るような素晴らしい作品です。彼女が長年抱いていた「サックス奏者として生きる以上コルトレーンの『Ballads』のようなアルバムを作りたい」という想いが自身のルーツでもあるキューバ音楽「フィーリン」の新解釈という形で実を結びました。圧倒的なテクニックを持ちながらもそれを誇示せず余裕すら感じさせる彼女のサックスに、キューバの天才ピアニスト、ゴンサロ・ルバルカバの美しく豊かな旋律が寄り添い、さらに現代最高峰の歌姫セシル・マクローリン・サルヴァントの歌声も華を添えとてもロマンティックな世界観を作り上げました。つくづくスペイン語圏で育った彼女だからこそ表現できた心に深く染み入る美しいバラード集だと思います。アルダナの新たな一面と「フィーリン」という音楽の洗練された魅力をぜひじっくりと味わってください。

JazzTOKYO　中村

FRUE 出演の注目シンガー 挑戦的な 1st

MOMOKO GILL Momoko

11



【レコード】
label
STRUT

昨年は FRUE でのパフォーマンスを皮切りにジャパンツアーも敢行。日本でも知名度が高まりつつある UK の注目シンガー／ドラマーの 1st ソロアルバムです。UK エレクトロ〜エクスペリメンタルの雄 MATTHEW HERBERT（『A NUDE』というスゴい内容のアルバムが有名 ...）が相棒なだけあり実験的な要素が作品全体にチラホラのぞきます。が、クールな歌声がトゲのある演奏の音色を落ち着けるようにマッチしており、心地よく聴き切ることができる絶妙なバランスを生み出してます。今年の店頭演奏でも特に幅広いお客様から反応をいただいた 1 作です。R&B、エレクトロ、実験音楽 ... など幅広いリスナーに気に入っていただけるかと。フルート、ハープ、コーラスの美麗な響きが絡み合う A3"HEAVY" は多幸感がヤバいです ...

立川店　飯澤

現代版ド直球スピリチュアル・ジャズの傑作

12

OLA TUNJI　Ola Tunji



【レコード】
label
W.E.R.F.

後期コルトレーンフォロワーバンド。私はジャンルとして「後期コルトレーン」があっても良いと思います、あの感じをそのままやるっていう。レギュラーメンバー Ornella Noulet（Sax, Per）、Oscar Teruel（P）、Anthony Jouravsky（B）、Egon Wolfson（Ds, Per）の 4 人に、Roman Raynaud（G）が曲によって加わり、B 面 1 曲目のみ Lucile Revel（VO, Per）が参加しています。あくまで想像ですが、アリス・コルトレーンのハープの雰囲気を狙ってギターを入れたら結果的にデビット・フュージンスキーの雰囲気が出て、面白い味付けになっています。民族音楽的コンテンポラリーギターだから後期コルトレーンとの親和性は良いです。曲は全てオリジナルの様ですが、後期コルトレーンのあの感じがムンムンに漂っています。

新宿ジャズ館　木村

LA 現行強力クインテットによる祝祭の夜

13

SML　Spontaneous Music Live



【レコード】
label
INTERNATIONAL
ANTHEM

ジョシュ・ジョンソン（SAX）、グレゴリー・ユールマン（G）、アンナ・バターズ（B）ら、INTERNATIONAL ANTHEM を中心に個人名義作を発表してきた面々が集った LA 現行強力クインテットが SML だ。2024 年より彼らはライブでの即興演奏を基にポストプロダクションを施してアルバムをリリースしてきた。エレクトリック・マイルスを想起させる手法だが、3RD にして本作が彼ら初の無編集盤となる。現場では 5 人が足元に明かりを灯して向かい合って演奏し、観客は円形に彼らを囲んでその場で生まれる音楽に耳を傾ける。それはどこか儀式めいており、幼少期に体験したキャンプファイヤーの点火式を思い出した。仮装した火の神から聖火を譲り受けたあの夜のよう、気分が高揚して沸々と力が湧いてくる。モチーフをミニマルに繰り返しながらポリリズミックに交錯する音に耳が悦び、グルーヴに身体が揺さぶられる。秀逸なライブ盤だ。

横浜関内ジャズ館　久保田

身体に宿る記憶と感情を思いのまま表現

14

SPARKLMAMI　In This Body



【レコード】
label
VERVE

なんかジャケットに描かれている本人と手袋が気になりました。テキサス生まれ、シカゴを拠点に活動するマルチアーティスト、SPARKLMAMI こと Ariella Granados の VERVE デビュー作です。クラブミュージックの高揚感と、型にはまらない実験性が交差。1970 年代ブラジリアン・ジャズ、メキシカン・ボレロ、ファンク、ソウル、アシッド・ジャズ、ヒップホップ、ベッドルームポップ、ハイパーポップ、ローファイ、エレクトロニックを自由に横断し、即興性あふれるサウンドへと昇華。きらめきとざらつき、衝動と繊細さが入り混じる音の世界に引き込まれます。身体で感じること、音に身をゆだねながら聴いてほしい。どこまでも開放的で、JAZZ、R&B 好きはもちろん、ジャンルにとらわれない新しい音楽を探している方にもおすすめです。

商品部　西川

スキップし続け 15 年（でも全然楽しい！）

15

TOMEKA REID Dance! Skip! Hop!



【CD】
label
OUT OF YOUR HEAD RECORDS

シカゴを拠点に活動するチェリスト、トミーカ・リード。AACM とも関わりがあるという、前衛派を地で行くアート・ジャズの体現者だ。このカルテットの結成は 2010 年、界隈でしばしば名前を見かける猛者 4 名で 15 年以上も活動していることになる。1 目はバップ、トマス・フジワラのザクザク進むブラシ、淡々とぶっ飛ぶソロを同時に楽しむ。2 曲目はラテン、アルコ（弓）の裏でみょーんと飛翔するメアリー・ハルヴォーソン。三曲目はファンキーなリズムでソロを取るリードとの応酬、ハルヴォーソンは爆発。四曲目はバラード、各メンバー得意とする空間系バッキングが文字通りオーロラのように広がる。五曲目はインプロ色が強く、静謐ながら雄弁、息の合ったアンサンブルを堪能できる。各曲にカラーがあり、15 年続いているバンドとは到底思えないワクワク感で溢れている。永遠にフレッシュでいられることこそが才能であり、このバンドの本質なのだと知る。

吉祥寺ジャズ館　山田

2 年連続でタイラー・ヘンダーソンなのだ

16

TYLER HENDERSON Long Game



【CD】
label
CELLAR LIVE

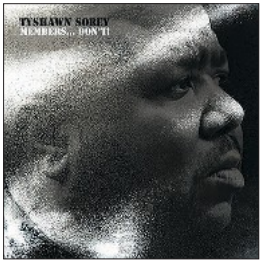
こうした企画で、毎年同じような作品を推薦するのも何だし、かといって趣味がころころ変わるのも……とかいろいろな思いが巡るなか、それでも 2 年連続タイラー・ヘンダーソンを選びたい。前回がデビュー盤、今回は 2 作目だ。NY を拠点にするピアニスト。端正なタッチ、ますますブレなくスイングするトリオと思う。今作は自作曲が中心、全曲いい。といいつつ、2 曲のミデアム〜スローのスタンダード、そこでのじれったい位に小出しにされるピアニズムが印象的で私的ハイライトでした。で、以前、トミー・フラナガン・トリオのレギュラーを務めたドラマーが来店した時、ちょうどテイラー（デビュー盤）がかかっていて、いいピアノだね、誰？と尋ねられたのを思い出す。さらに、ドラムもナイスだ！とジャケを手に取ると……あ、マイ・スチューデント……と写真を撮って連絡していました。えー、やっぱり耳惹かれるピアノなのですね。

JazzTOKYO　神尾

現代ジャズの深層を描く新たな金字塔

17

TYSHAWN SOREY Members...Don't!



【CD】
label
PI RECORDINGS

タイショーン・ソーリーの最新作は、彼が現代音楽家やフリー・ジャズの枠を超え、モダン・ジャズの深層を深く体得していることを証明する圧倒的な傑作だ。インプロヴァイズされた最先端のジャズ・サウンドへ聴き手を導いていくため、マックス・ローチへのトリビュートという親しみやすい文脈を打ち出し、作品へ踏み込む心理的ハードルを劇的に下げるというアプローチも実に巧妙である。特筆すべきは、ニューヨークのジャズ・ギャラリーにおける熱気あふれるライブ録音でありながら、スタジオ盤を凌駕する極上の緊張感と有機的一体感を宿している点にある。メンバー全員が阿吽の呼吸で極限のインタラクションを展開し、九十分を超える長大な組曲へと昇華させたその生々しいエネルギーは、現代ジャズ・シーンにおける新たなライブ盤の金字塔として、すべての聴き手の心を激しく揺さぶるだろう。

新宿ジャズ館　四浦

古里愛とバークリーの原石による暖音

グレッグ・タン　Sixth Week

18



【CD】
label
TryOlive Labels

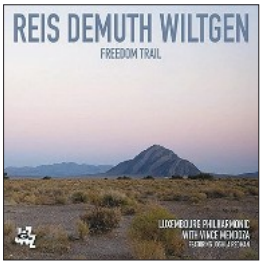
バークリー音楽大学出身の若き才能が集結した、ベーシスト Greg Tan の初リーダー作。作品全体を包み込むのは、Greg の温かな人間性が滲み出る、深く豊かな響きと包容力を備えたベース。その確かな土台の上で、古里愛はトレードマークともいえる超絶技巧や速弾きをあえて前面に押し出さず、暖かなメロディに寄り添う。繊細なタッチや絶妙な間合い、ふとした音の揺らぎが生み出す余白は、楽曲に奥行きと豊かな表情をもたらしている。確かな技術を持ちながらも、型にはまることなく互いの感性をぶつけ合う同世代のミュージシャンたち。そこから生まれるサウンドは、若さゆえの迷いや葛藤、そして未来への期待を映し出し、時に繊細に、時に力強くその姿を変えていく。完成された美しさだけを追い求めるのではなく、演奏者同士の呼吸や即興の中で刻々と変化する、今この瞬間の熱量こそが本作の魅力。次代のジャズを担う才能たちの瑞々しい感性と可能性が鮮烈に刻まれた、期待に満ちた出発点。

商品部　磯崎

シンフォニック・ジャズの傑作

レイス・デムス・ウィルトゲン　フリーダム・トレイル

19



【CD】
label
MOCLOUD
RECORDS

『レイス・デムス・ウィルトゲン』の最新作はルクセンブルク・フィルハーモニー管弦楽団との共演で描く壮大なシンフォニック・ジャズ大作。オーケストラとの共演はジャズにおいては色物！邪道だ！と眉をひそめるジャズファンもいらっしゃるかもしれませんが、私は大好きです。特にキース・ジャレットの『Arbour Zena』は大傑作だと思っています。この作品もそれに迫るもので、まず、オーケストラのアレンジが素晴らしく、あくまでトリオを主役としながらも、元々シンプルで素朴なメロディーを豪華なサウンドに仕立て上げています。ゲストのジョシュア・レッドマンのソロも、ここ数年の中でベスト！と言えるような熱がこもったプレイで、バンドのテンションとグルーヴを大いに高めてくれています。それにしてもこれだけの大編成に大物ゲスト、さぞかし時間もお金もたくさんかかったことでしょうから、いっぱい売れてほしいなーと心から願う作品。

商品部　川村

発掘のロマン…昭和ジャズの香り

山本剛 / 峰純子　ライヴ・アット・ベイシー 1976

20



【CD】
label
SOLID RECORDS

1976 年初夏、峰純子が山本剛トリオと残した実況録音源集。今年の夏は何度も今作を流しながら、家で一人ゆったりとしていました。一関ベイシーの空気感、峰さんの歌声に寄り添う山本剛トリオの演奏、観客のこれでもかといった拍手喝采…こんなの良いに決まっているじゃないですか。加工されすぎていない淡白な音質がなんとも私好みで、峰さんのしっとりとスタンダードを歌い上げる様はまさに “Crooner”。MC もそのまま収録されており、全編を通してジャズの醍醐味を楽しめる作品となっています。トリオには大由彰（B）、大隅寿男（DS）が参加。余計なフレーズが省かれ、最低限の音数で構成された演奏は客を自然と歌へ誘導し、これ以上ない心地よさを演出しています。ジャケの絵も当時の和やかな現場をうまく表現しており、作品の魅力を引き立てている要素の一つ。全てを聞き終えた後に漂う昭和ジャズの香りがたまらない…寛ぎの一枚です。

JazzTOKYO　立石

聴くものを選ばない、ひらかれた庭

石川紅奈　Garden

21



【CD】
label
ユニバーサル
ミュージック

鮮やかな色彩となめらかなベースプレイ、ピュアな歌声にはっと目が覚める。彼女の歌は、透き通っていてクッションのような柔らかさの中に、タイム感や歌い回しにおいて独自のグルーヴが感じられる。それは彼女がベースで弾き語りをするということと、ジャズをメイン・フィールドにしながらも、はじめのルーツはスティーヴィー・ワンダーやマイケル・ジャクソンといったソウル・ミュージックなのだと知り、合点がいった。ミニー・リパートンとロイ・エアーズのカヴァーでは、ベースのリフの上で歌う彼女ならではのスタイルで始まり、中間部で颯爽とハープが登場。大林武司（p）、Taka Nawashiro（g）、Kan（per）を中心とした編成に、ジャズ、70s ソウル、ブラジリアンなフィールがひとつになったサウンドが映え、アレンジとソングライティングの才能にも魅了された。じっくり育ててきた彼女の庭が光りを浴びて花開いた傑作だと思う。

JazzTOKYO　松本

サイレントマスクでサイレントマスクに ??

平倉初音　サイレントマスク

22



【CD】
label
F.Tone Records

女性ジャズ音楽家にとってジャズファンの大半を占める中高年男性は厄介な存在にちがいない。自分もそうだが、確たるジャズ観をもつベテランファンほど無意識に上から目線である。その割に容姿や経歴に左右されて、良くも悪くも実力と評価にズレが生じる。しかし平倉初音はそんなことはモノともせず圧倒的な実力で聴く者を黙らせる。この 4th アルバムもタイトルそのままに静かな表情で聴き入り、唸ることになる。全曲ご本人のオリジナル。幕開けの重厚な“暗黒の父”は、伝統、様式、音楽産業、資本主義といったジャズにまつわる父権的要素との葛藤だろうか。続くモンクの憂鬱とケリーの躍動を感じる 2 曲を経て本題の組曲。内なる自己を掘り下げながら、同時にモダンジャズの核心を探究する。どっしりと地に足が着いたようでいて時おりふわりと浮遊する平倉初音のジャズは闇雲に時流に追従はしない。未だ未知数の潜在力に気づけるか試されている気がしてくる。

JazzTOKYO　赤尾

disk union レビュアー所属店舗	JazzTOKYO	新宿ジャズ館	渋谷ジャズ / レアグルーヴ館
吉祥寺ジャズ館	横浜関内ジャズ館	立川店	ディスクユニオン ジャズ オンラインショップ